

みずくらいど

校長 加藤雅弘

「振り返り」＝「メタ認知」の大切さ

着任してから非常に多忙でなかなか授業を見に行く時間がとれません。昨日は数分間でしたが教室を巡ることができました。そのわずか数分間でしたが、素晴らしい学びの姿がありました。

6年生算数「文字と式」の一コマ、授業終末の場面で、授業者が「振り返り」を書く視点を示しました。「わ・か・い」の頭文字を示し、

「『わ』は、『分かったこと』、では、他の二つは何だと思う？」

と発問しました。すると、児童からは

「『か』は、変わったこと」

「『い』は、意味が分かった」

と考えが出されました。授業者の意図としては「『か』は感じたこと」「『い』は生かせそうなこと」だったのですが、児童の発言は、それぞれ大變的を射たものでした。「意味が分かる」と考えた児童は、ノートに「はじめ分からなかったけれど、意味が分かってからはスラスラできた」という主旨のことが書いていました。

保護者会でも申し上げましたように、新しい学力の3番目「学びに向かう力」（評価する観点の言葉は「主体的に学習に取り組む態度」）は、これまでの「関心・意欲・態度」から一歩進んで要素が含まれました。それが「自己の学習を調整する側面」（メタ認知）です。これは、もう一人の自分が、自分の学びの状況を俯瞰（ふかん＝高い所から見下ろすようにながめる）することです。この把握の仕方ができると、これまでの自分との変化、新たな気づき、今後にどう生かせそうか、なぜ、この学習をしているのかなど一段も二段も深い学びになります。学習を主体的に取り組んでいくためには非常に重要です。

では、どのような視点で振り返りを書かせることがよいのか？これはまだ研究が緒に就いたばかりです。私は社会科を専門的に研究していますが（小学校は全科を教えますが、各教員は、自分の教科を決めて研鑽に励んでいます）、この要素は、文部科学省で学習指導要領を定める方々との研究会でも試行錯誤の段階です。本校の様子を担当に聞いてみると、昨年からの振り返りについて取り組みを始めていて、学年で相談しながらまさに試行錯誤し、年度の前半と後半で提示する視点も変わっていったとのこと。このような土壌があつての上記の児童の姿があつたのだと理解しました。

授業の「振り返り」を書くという作業は、自分の学びの状況を客観視（メタ認知）し、その意味を考えたり、今後にどう生かせそうか見通しをもったりすることに直結します。引き続き、学校を挙げて試行し、それぞれの学年の発達段階に応じた、また、教科の特性があるのかも含め、どのような「振り返り」を書くことが20年後の子供にとって有益なのかを探って参ります。ご家庭でも自主学習における「振り返り」を書く際、参考にいただければ幸いです。